

オリエンタリズムは「歪み」か、あるいはオリエンタリズムは存在するか

田中英式
(愛知大学経営学部)

ディスカッションペーパー（以下、DP）では、オリエンタリズムの弊害が再三にわたって批判されながらも、今日に至るまで根強く再生産されていることを指摘した上で、結論の中で、オリエンタリズムを修正すべき「歪み」として捉えている。

このコメントペーパーの問題意識は、現在のグローバル社会において、果たしてオリエンタリズムを「歪み」として認識すべきかどうか、さらには、そもそも「西洋中心主義」としてのオリエンタリズム自体が存在するかどうかという点である。以下では、この問題について、「オリエンタリズム」と「近代化」との関係からみていきたい。

地域研究の対象はいわゆる発展途上国と呼ばれる国々が中心である。その発展途上国の開発・発展を目的とする国際開発学の領域では、発展途上国の近代化が主要な課題の一つとして議論されてきた。その際、西欧諸国型の近代化ではないオルタナティブの必要性は指摘されつつも、その具体的な方向付けや戦略が提示されたことはこれまで1度もなかった（佐藤[2004]、p.90）。したがって、戦後、開発途上国の発展・開発は、西洋型の近代化の枠組みの中で進行し、事実、アジア諸国の中でも多くの国が発展を遂げてきた。その意味で、DPにおける「70年代後半以後、21世紀初頭の今日に至るまでのNIEs、ASEAN、そして中国、インドなどのアジア諸国の高度経済成長による経済「離陸」の現象は、アジアが西洋に打ち克つたのではなく、むしろ「西洋近代」の「自己拡張、自己実現」にほかならなかった」（p.18）という指摘は非常に重要である。しかしながら、ここで強調したい点は、西洋型の近代化以外のオルタナティブは存在しないという認識は、先進国・途上国の両者を含む現在のグローバル社会に共通するものではないかという点である。DPでは、地域研究における諸主体と研究者自身の諸主体との間にオリエンタリズムが「歪み」として介在することを問題としているが、「オリエンタリズム＝西欧型の近代化を優位と考えること」という「目的意思的な態度」（価値観）を両者共に共通して持っているのであれば、もはや「歪み」とは言えないのではないだろうか。

さらに、アジアの経済「離陸」の経験、および、いわゆる「内発的発展論」の議論を鑑みれば、現在のグローバル社会が共有している「近代化」という認識自体に、そもそも「西洋中心主義」という意味でのオリエンタリズムが存在しているのかという議論も可能である。すなわち、アジア経済「離陸」、および内発的発展論以降の近代化の議論では、開発途上国は西欧諸国とは違った様々な経路を通じて近代化を達成することができる、あるいはすべきだという考えが多く見られる（内発的発展論に関しては鶴見[1996]、西洋中心主義以

外の近代化に関する議論については、Dallmayr[1996]、駒井(編)[1998]等を参照。また直接近代化を扱ったものではないが、現在のグローバリゼーションについて Bhagwati[2004]も参照)。つまり「近代化」自体は西欧諸国が生み出したものであっても、その達成プロセスはかならずしも西欧型が優位性を持つものではないという理解である。この点に関して、DP では、「政治学」、「経済学」、「経営学」等の既存専門領域では「オリエンタリズム批判を実質的に免れた」としているが、むしろ、実際のアジアの「離陸」過程を通じて、各専門領域における「西洋型の優位性」が否定されてきたのではないだろうか。例えば、政治経済学の領域では、世界銀行の『東アジアの奇跡』(World Bank[1992])において、西欧とは異なるアジア型の政府の優位性が指摘され、専門領域のディシプリンに大きな影響力を持ってきた。また経営学の領域では日本のものづくりの方法(生産システム)や企業間関係の優位性(例えば、代表的な文献として浅沼[1997])はそのディシプリンに大きな影響を与えてきた。すなわち、「西洋近代」はその自己拡張、自己実現の過程で、「西洋」から離れ、「東洋」を含めた多種多様な近代化の可能性を提示しているということである。このように、現代のグローバル社会が共有している近代化という認識が既に「西洋中心主義以外の近代化」であれば、もはやそこにオリエンタリズム自体が存在していないということになる。

以上のように、オリエンタリズムとは果たして「歪み」として認識すべきものか、あるいはそもそもオリエンタリズムが存在するのかどうかという点がこのコメントペーパーの問題提起である。

引用文献

- 浅沼万里[1997]『日本の企業組織革新的適応のメカニズム—長期取引関係の構造と機能』東洋経済新報社
- Bagwati, J. [2004] *In defense of globalization*. Oxford university press. (邦訳:鈴木主税・桃井緑美子(訳)[2005]『グローバリゼーションを擁護する』日本経済新聞社)
- Dallmayr, F.[1996] *Beyond Orientalism*. State university of New York press. (邦訳:片岡幸彦(監訳)[2001]『オリエンタリズムを超えて:東洋と静養の知的対決と融合の道』新評論)
- 駒井洋(編)[1998]『脱オリエンタリズムとしての社会知:社会科学の非西欧的パラダイムの可能性』ミネルヴァ書房
- 佐藤寛[2004]「近代化論への挑戦」松岡俊二(編)[2004]『国際開発研究—自立的発展へ向けた新たな挑戦』東洋経済新報社 pp.89-109
- 鶴見和子[1996]『内発的発展論の展開』筑摩書房
- World Bank[1993]. *The East Asian Miracle*. Oxford University Press. (邦訳:白鳥正喜(監訳)[1994]『東アジアの奇跡』東洋経済新報社)